Competition

がん研究会有明病院画像診断センター核医学チーム　我妻　慧

表題の competition（競争，争い）は Dr. Mosely, Ph.D.が幾度も使っていた言葉であり，非常に印象に残っている．本研修での目的は PET を用いた分子イメージングの最先端について触れること，様々な分野で活躍している研修メンバーとの出会いであった．核医学に関する研修として，1 日目に Lucas Center 内のサイクロトロン関連施設の見学があり，3 日目に前臨床の分子イメージング，PET/CT，PET/MR の講義があった．病院の核医学部門の見学がなかった事が心残りであった．分子イメージングの講義では，Dr. Biswal, M.D.の骨折の幹細胞治療の PET 分子イメージングと MRI によるペインイメージングが興味深かった．骨転移の痛みのイメージングや治療に応用出来るかの質問には，痛みの原因が複合的であり単純なイメージング・治療は難しいという回答であった．私は骨転移の診断・治療に興味があるため，骨転移の病的骨折や痛みの治療への応用に期待したい．

1．日米の診療放射線技師の違いについて

米国では一般撮影以外の業務を行うためには専門技術者の免許の取得が必要となり，規定された講習を受講しなければならない．多くの Radiological Technologist は 1 つ以上の専門技術者の免許を持っていた．シフト制を導入しており，職域や業務内容が明確に定められていた．日本の診療放射線技師は業務で生じた疑問・問題を解決し業務へとフィードバックする．同時にその結果を学会発表や論文にして自己研鑽をしている．また，学位を取得している診療放射線技師も増加傾向にある．制度が違うため一概に比較は出来ないが，以上の点が日米の診療放射線技師の違いであると考える．

2．診療放射線技師における国際的視野について

診療放射線技師の国際的視野の必要性や国際化の重要性は研修メンバー全員の共通認識であった．国際的視野を持つための手段に国際学会や海外研修に参加するなどがある．これらの経験を通して国内外に広い視野を持ち，国際学会での発表や英語論文への投稿をする能力を培うことで，個人の国際化がなされると考える．そのためにも学会のサポートは必須であるし，海外研修・留学経験者は知識や経験を次世代に繋げなければならない．教育機関も JSRT の国際化の現状を鑑み，実践的な英語教育を実施する必要がある．

Stanford 研修 8 期生にして初のメンバー全員が男性であった．最初は不安もあったが，研修や食事を通し親睦を深める事が出来た．年代，専門性，職種の違う 21 人が毎日深夜まで議論することが出来たのは非常に有意義で貴重な時間であった．今後，国内外関わらず競争に出て行く彼らに負けることのないように日々の業務や研究に邁進したい。

最後に，本研修に際して多大なご尽力をいただいた JSRT，Stanford 大学，GEHC-J の関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます．また，研修参加に快く送り出して頂いたがん研究会有明病院核医学チームの皆様にも深謝申し上げます．

筆者（左）と Pain Imaging の講師 Dr. Biswal, M.D.（右）